
朝の一時～意地悪な彼女と～

氷純

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

朝の一時／意地悪な彼女と／

【Nコード】

N0663V

【作者名】

氷純

【あらすじ】

毎朝、僕は彼女に意地悪されている。

短編『猫の逆立ち』から続けているシリーズ物。

人の不幸は（前書き）

昨日に投稿した『猫の逆立ち』が日間文学ランキングのトップになった嬉しさから続編を書いてしまいました。

人の不幸は

「私は『人の不幸は蜜の味』って言葉がとてつもなく間抜けに思えるのよ」

早朝の涼しい風が吹き込む教室で隣に座る彼女が唐突に言い出した。

僕の方に身を乗り出して、開いた小説を指さしている。指の先には彼女が間抜けと評する言葉が書かれていた。

小説の前後を確認する。どうやら、話の流れが間抜けている訳ではないらしい。

「道徳的に問題はあるけど、人の本性を表した上手い表現だと思うよ」

僕は一般的だろう意見で彼女の言葉を否定する。

僕の意見に頷いた彼女は小説を閉じた。

「確かに、そういうある種の醜い部分があるのを否定しないわ」

「君なら尚更そうだよね」

常日頃の復讐を兼ねて悪態を吐く僕に対して、楽しそうにそれについて何時も以上にあくどい笑みを浮かべる彼女。

「その悪口も蜜を味わいたいから口について出るの」

綺麗に受け止められてしまった。

彼女は話を展開する。

「人は皆その蜜を吸いたがる」

だからこそ、と彼女は言葉を繋ぐ。

「人の不幸を聞いたら足下に注意すべきなのよ」

……確かに示唆に富んでいる。いささか殺伐とした嫌いはあるけれど。

特に突っ込んで聞くとところが見あたらない。彼女は何時も僕をやりこめて楽しむはずだからこれで終わりとは思えないのに。

「この前提で考えると、あなたが言った先ほどの悪口が気になるわ」

そこに繋げるのかと思うと同時に彼女が浮かべたあくどい笑みに合点がいった。

「つまり、あなたは本当に間抜けね」

僕を罵倒した彼女はとびっきりのお菓子を頬張ったような表情。それはそうだ。

彼女にしてみれば、悪態を吐いて軽く受け止められた揚げ句に、注意不足だこの間抜け、と言われた僕の不幸。さぞかし甘い蜜だろう。

「やっぱり楽しんでるじゃないか」

僕の指摘に彼女はクスクス笑う。

「ちゃんと注意しているわ。そして、あなたをやりこめて足下に敷いておくの」

どうやら、彼女は養蜂家にでもなるらしい。

間抜けな働き蜂たる僕はため息を吐いた。

失敗は（前書き）

『猫の逆立ち』や『人の不幸は』を読んでおくと分かりやすくなります。

失敗は

年甲斐もなく転んでしまった。

通りがかりの見知らぬサラリーマンが抱える朝の憂鬱を吹き飛ばすほどの盛大な転び方だった。

痛む肘を見てみると出血もしている。

保健の先生もまだ来ていない早朝だから、僕は仕方なく治療を後回しにして教室に入った。

「おはよう」

いつものように挨拶する。

彼女は読んでいた小説から僕へちらりと視線を向けた後、何気ない調子で顔を上げた。

「肘から血が出てるわ」

見たままを報告する彼女。やはりというか、動揺する素振りもない。

「ちょっと待ってて」

席に着いた僕にそう言って彼女は教室を出て行った。

僕が教科書を机に放り込んでいる間にハンカチを濡らしてきた彼女は僕の傷口をそれで拭き、絆創膏を貼り付けた。

割と大きな傷にも対応できる四角い絆創膏だ。

「何時も持ち歩いてるの」

僕の顔から疑問を読み取ったのだろう、彼女は僕が問う前に答えた。

不意に彼女の瞳が嫌な光を宿した。

「人は誰しも失敗するものよ」

始まった。彼女の質の悪い遊びが。

言葉だけは転んで怪我まで創った僕へのフォローなので、返事をせずに無視すれば僕らの関係に角が立つ。

けれども僕は彼女の言葉遊びで散々な目に会っているのだし、今

更のように関係を気にするのも馬鹿げていた。なので僕は沈黙を貫くことを選択し、身を守ることにする。

「……けれど、失敗は成功の元とも言うわ」

僕が何も言わないと見て彼女は言葉を繋いだ。少し不満そうな顔をしているけれどきつと演技だろう。

それでも、沈黙を守る。言葉遊びなら遊び道具がない限り手玉に取られることはない。

僕は内心ほくそ笑む。失敗は成功の元、確かにその通りじゃないか。

彼女はわざとらしく僕の目の前で手を振ったりしている。

「でも、必ず成功するわけでもないの。誰かが足を引っ張ったり裏をかいたりするのよ」

昨日の話を持ち出す彼女。どことなく流れが不穏だ。何がそう感じる原因だろう。

「私のようにね」

不味い。語調が少し荒い。怒ってしまったようだ。

つまり、と彼女は締めめの言葉を口にする。

「失敗の積み重ねが成功に繋がるとは限らないの」

……ああ、やられた。何も言わない内に言質を取られていた。

彼女は狡猾な言葉で僕の警戒心を逆手に取ってこう言ったのだ。

僕の失敗は成功には繋がらないただの徒労だ、と。

そう言う形で僕を罵倒するのか、と少し感心してしまう。

実際、または彼女に裏をかかれた身だから否定も出来ない。

「昨日と同じ蜜の味だわ」

止めとばかりに言われてしまう。

やはり彼女は不機嫌なようだ。多分、これも僕の失敗だろう。

どうやって機嫌を取ったものかと考えながら、僕は絆創膏のお礼を口にしようとして、気付く。

彼女が絆創膏を持っていたという事は同じ失敗をしたことがあったからではないだろうか？

盛大に転ぶ彼女を想像して自然と笑みが広がる。

僕の笑みに視線をやった彼女はつまらなそうに呟いた。

「転ばぬ先の絆創膏」

僕の笑みは消え、肩が落ちた。

彼女には失敗すら必要ないらしい。

彼女なりの応援

教室中に響き渡るセミ達のわめき声に辟易としながら、僕は白紙の進路調査表を見つめる。

せっかく土曜で午前授業だというのにこんな事で居残りとはついてない。

クラスメイトもみんな帰ってしまった。

彼女を除いて……。

僕は彼女の席へ何とはなしに目を向ける。

彼女は来週月曜日の朝礼で先日出場した大会の賞を受け取るとかで体育館でのリハーサル中だ。

斜に構えた印象の強い彼女だが、ちゃんと高校生活しているのだ。帰宅部の僕としては少し羨ましくもある。隣の芝は青いという奴か。

そう言う訳で進路調査表も書けないでいる。どの選択も青く見えるのだから仕方ない。

せめて一番青い選択が解ればいいのに、夏らしく何処にも雑草が生えているのだ。成績の問題やお金という厄介な雑草だ。

抜くためには努力するしかない。彼女なら手段を変えるのかも知れないけども……。

そんな取り留めもない思考について、ため息を吐く。ほかに考えるべき事がいくつもあるのに僕は何を考えているんだか。

教室の扉が開く音がして視線をやれば、彼女がペットボトルのお茶を片手に入ってくるところだった。

「……飲む？」

彼女がお茶を掲げて聞いてくる。そんなに欲しそうな顔してますか？

「私と間接キスする権利、百円で手を打とうか」

「それは安い」

彼女がイタズラっぽく言う冗談に笑顔で返す。

彼女は満更でもなさそうにクスクス笑いながらお茶のフタを開けて渡してくれた。

なんだか機嫌が良さそうだ。僕の隣に座る彼女を見てそう感じた。これなら遊ばれる事もなさそう。ちよつと安心する。

「進路、まだ決めてないの？」

彼女が僕の手元をのぞき込んだ。

彼女にとって僕の庭の芝は青いだろうか？

僕が肩を竦めると彼女は苦笑した。

「まあ、悩むわよね。正解があるわけでもないから」

僕からお茶を取り返して彼女は躊躇なく口を付ける。こういう所で距離を感じさせないから、何度手玉に取られても嫌いになれないんだと思う。

「正解はないけど、不正解もないわ。正解が後で不正解になる事もあれば、その逆もある」

彼女はお茶のフタを閉めると僕の机に置いた。どうやら貰っているらしい。

「参考にならないよ」

「当たり前じゃない。芝の青さは参考にならないって事よ。青い芝生が欲しいなら丹念な手入れをするか、もしくは」

「もしくは？」

鞆を背負う彼女に先を促す。

「庭師を雇うか、ね」

含み笑いを残して彼女は教室を出ていった。

庭師を雇う？

雑草を他人に抜かせるという意味だろうか？

提案するくらいだから彼女は頼めば抜いてくれるのだろう。

つまり、僕がどんな選択をしても彼女は応援すると言っているのか。

「回りくどいなあ」

彼女らしいけど。

それに彼女との庭いじりも青く見えてくる。

一緒の大学に行くとすれば早めに庭師を雇う必要があるだろうな
と思いつつ、僕は第一希望を記入した。

彼女なりの応援（後書き）

今回、毒っ気を抜いてみました。

引っ掻いた猫（前書き）

このシリーズを全部読んでいないと分からない回です。

引っ掻いた猫

彼女に受験勉強を手伝って貰おうと思う。

だけど彼女のことだからそれをネタに意地悪な言葉遊びを仕掛けてくるだろう事は想像に難くない。

僕は一晩かけて様々なパターンを予想した。

努力は自分でするべきだと言われれば猫の逆立ちを持ち出すし、そもそも庭師を雇えと言ったのは彼女だ。

そうして準備万端に整えた僕は彼女が二つ返事で頷いたのに驚いた。

「マジで？」

訊ねてしまつて頭を抱えなくなった。頼む側の態度じゃないだろう。

「私は友人を見捨てるほど薄情ではないわ」

そっぽを向いて「心外ね」と付け足す彼女。

僕はやぶ蛇だったと自覚して覚悟を決める。絶対にただではすまない。

「きつと私が渋った時の対策も立ててきたんでしょうね」

横目で睨まれてびくりと震える僕。完全に見透かされている。

「つまり、説得するのに準備が必要な程に筋金入りの薄情者だと、私のことをそう思っているのね？」

何もそこまで言っていないと反論したいけれど僕の行動はそういう意味にもとれる。

「庭師を雇えとまで発破をかけた私に頼むにしては随分な態度よね」
彼女の視線が鋭くなる。心臓を射抜かれるような錯覚すらあり、僕は何とか言い訳しようと口を開く。

「最後には引き受けるにしても君の事だから、ここぞとばかりに僕で遊ぶと思ったんだ」

「他人の頼みごとを遊び道具にする不謹慎な女と思つてたのね」

……そう思っていました。

彼女は眉を顰めて机に頬杖をついた。

「階段を前に途方に暮れる逆立ちした猫に手を差し伸べたら引つかれたわ」

彼女の呟き。

人の好意を疑った挙げ句に傷つける。そんな酷い猫はどう考えても今の僕だ。

「ごめんなさい」

僕は深々と頭を下げる。

小さくため息をついた彼女は勉強を見る代わりに今週末の予定を入れるなど条件を出してきた。

「了解しました。よろしく願います」

「泣き言も言えないくらい厳しくするから覚悟しなさい」

矛を納めてくれた彼女はそれでも怒りを隠さない声でそう言った。

引っ掻いた猫（後書き）

今週末デート話を投稿できると良いけど、この二人に色気は期待できないなあ。

カラスの露天

珍しく僕より遅く登校して来た彼女はえらく不機嫌だった。昨日も朝の一件以来、放課後に勉強を彼女に見て貰う時ですら碌に目も合わせてくれなかった。

そんな訳で僕はこれ以上機嫌を損ねないよう彼女に出された宿題をそつと渡した。

「君のおかげでかなり解けた気がするよ」

僕が言うのに頷いて、彼女は立ったまま僕から宿題を受け取るとばらばらとめくり始める。

「近所に光り物を集めるカラスがいるのよ」

彼女は僕の隣に腰掛けるなり世間話を始めた。

僕は身を硬くする。

「ガラスでも金属でも掠め盗っていく迷惑な奴なの。私もお気に入りへのアピンを盗られたわ」

頭痛の種ですと言わんばかりに側頭部を指で押さえる彼女。

ヘアピンを盗られたのが不機嫌の原因だろうか。それともやはり昨日の一件か。

「そんなカラスが昨日、公園の端で戦利品を並べていたのよ」

戦利品という事は光り物か。コレクションを綺麗に並べて悦に入るのだろうか。

「並べ終えたカラスが翼で地面を叩きながら大きな声で鳴いたかと思ふとあちこちから沢山のカラスが餌をくわえてやって来て、次々と盗品と餌が交換されていたの」

彼女が窓の外に目をやる。視線を辿ると一羽のカラスが電線の上で翼を休めていた。

「そう、私が戦利品だと思っていたのは商品だったのよ」

カラスの露天商。売り物は盗品だから元手はゼロか。面白そうだし見てみたい。

「結局、商品は一つを残して餌と交換されたわ」

「残った一つは？」

彼女は盛大なため息と共に吐き出した。

「私のヘアピンよ」

忌々しいと口調の端々に表れていた。

「真っ先に売れるはずなのに……。本当に腹立たしいわ」

彼女はイライラと外のカラスを睨みつける。可愛そうに、と射竦められたカラスへ同情の眼差しを向ける僕に彼女は宿題を突き返してきた。

さっさと受け取れと鼻先に突きつけられたそれを僕は手にとる。

彼女の話は喩え話だろう。

ヘアピンに当たるのがこの宿題だとすると、彼女の期待を裏切って……。

背筋がぞつとした。恐る恐る見れば、カラスに向けていたよりずっと冷たい彼女の眼差しとぶつかった。

そんなに間違いだらけでしたか……。

せめて採点だけでもして貰いたいと請う僕に全て見直せと非道な言葉をぶつける彼女。

「自信を持つ前に実力をつけなさい」

泣き言を許さないとの宣言は本気らしい。

カラス達の関係（前書き）

『引っ掻いた猫』で予告したデート回です。

カラス達の関係

夏らしい白雲が青い空を泳いでいく。

週末の予定を彼女に言われた通りに空けて迎えた今日、僕は学校の正門前で彼女を待っていた。

「早いね」

約束の十時を前に彼女はやって来た。

夏らしいラフな格好をしているが男物なのは何故なのか。

がっかりしている僕に首を傾げて愛らしく微笑みを向ける彼女。

絶対に確信犯だ。

指摘してもいじられるだけだと思い本日の予定を訊く。

「本屋で参考書を買った後、お昼を食べて映画を見て解散」

彼女が歩き出すので僕は隣に並ぶ。

手を繋いだりとか……ないか。

参考書を買って少し散歩した僕らは昼食をちょうど通りがかったそば屋でとることにした。

今日は彼女の好意を疑ったお詫びなので奢ろうと申し出た僕に彼女は首を横に振った。

「割り勘でいいわ」

「遠慮しなくてもいいよ」

彼女がいいと言うからには奢らなくとも今日はお詫びとして成立しているのだけど初デートで割り勘というのは甲斐性がない。彼女がデートと認識してない点は無視する。これはプライドとか今後の関係発展を見据えた問題なのだ。

彼女は落ち着いた仕草でお冷やに口をつけて何事か考えていたがふと窓に目をやって話し出す。

「狐が釣りをし——」

「ちよっと待った！」

慌てて遮る。だってそうだろう？ 彼女に語らせたら言いくるめられるに決まっている。

僕が彼女に奢って関係発展を成し遂げるには彼女の語りは高すぎるハードルだ。今回は奢る事を一度断られているのだから尚更。全く何だって蕎麦を奢るだけで腹の探り合いをしなければならぬのか。

奢るための洒落た方便を考える僕を見つめる彼女。どこか期待を含んだ視線は早くしないといったずらすぞと、語っている。

「前に君が話してたカラスだけど、きつと露天を開いていたわけじゃないよ」

僕は切り出す。

彼女は薄桃色の唇で笑みを形作ると無言で先を促してくれた。

「カラスは光り物を集めて他のカラスに渡していただけで、餌を受け取っていたのはそれがお礼だったからじゃないかな」

この解釈ならカラス達の関係は好意で成り立っていることになる。カラスが僕達なら蕎麦を奢るのは彼女が勉強を見てくれるお礼だ。

勿論、彼女も方便だと分かっているだろう。でも純粹な好意だと言われてしまえば下手に断るのは無粋、故に彼女はそれをしない。

そんな下心を内包した『純粹な好意』を彼女は割と気に入ってくれたらしい。

「そう言うことなら有り難く奢ってもらうわ」

彼女は堪えきれない様子でクスクス笑っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0663v/>

朝の一時～意地悪な彼女と～

2011年11月15日07時34分発行